群教セ	F09 － 01
	平15.217集

不登校傾向にある生徒への教室復帰を促す援助の工夫

――「相談基地」「発信基地」としての「ほっとルーム」の活用を通して――

特別研修員　　新井　健一　（吉井町立西中学校）

《研究の概要》

本研究は、不登校傾向にある生徒に良好な対人関係をきずけるようにするとともに、所属学級に温かな雰囲気を育て、教室復帰を促す。そのために、対象生徒にかかわる者でチームを編成し、それぞれの特性を生かした援助を行う。その中核となるのが「ほっとルーム」で、相談活動の場として、対人関係能力を高めるためのスキルの計画と実施、学級へのエンカウンターの計画と実施のための基地として活用し、教室復帰を促す研究である。

【キーワード：教育相談　中学校　不登校　ほっとルーム　エンカウンター　チーム援助】

Ⅰ　主題設定の理由

増え続ける不登校児童・生徒についての問題が、学校現場だけでなく社会的な問題として大きく取り上げられている。これは、核家族化、少子化など大きく変化していく社会の中で、家庭の教育力の低下や子どもたちの人間関係が希薄になっていることが大きな課題として影響していると考える。

本校でも、不登校傾向がみられる生徒がいる。その生徒は、小学校在学中から不登校傾向がみられ、中学校入学で、環境が変わった直後は登校できていたが、数ヶ月経つ間に、以前のような不登校傾向がみられるようになった。その生徒の抱える課題としては、家庭の事情による、家庭の教育力の弱さと、それに関係して、周りの人とのコミュニケーションがうまく図れず、望ましい人間関係がきずけないことが考えられる。

そこで、本研究では、不登校傾向がみられる生徒に対して、学級担任を中心として学年主任、養護教諭など、対象となる生徒に対して支援できる人的資源を集め、チームを組んで援助に当たる。また、不登校傾向の生徒が所属する学級にも働きかけ、望ましい人間関係が作りやすい、学級環境にしていく。

具体的には、「相談基地」「発信基地」として、「ほっとルーム」を利用した指導を行っていく。「ほっとルーム」で不登校傾向のみられる生徒に対する相談に当たったり、「ほっとルーム」からカウンセリングを生かした人間関係づくりのスキルなどの情報を発信し、それをもとに学級等で援助・指導を行ったりしていく。

その結果、不登校傾向のみられる生徒の対人関係を円滑にするためのスキルの向上が図られるとともに、受け入れる学級での温かい雰囲気が育ち、それぞれの生徒の教室復帰を期待することができると考え、本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究の見通し

不登校傾向にある生徒に対して、人的資源を集めチームを組んで援助にあたる。その際、「ほっとルーム」を活用し、相談活動を通して対象生徒に良好な対人関係をきずく力をつけるとともに、「ほっとルーム」から発信された情報をもとに、所属学級に対して、構成的グループ・エンカウンターを生かした指導を行うことによって温かな雰囲気を育てる。それによって友達と関わる能力の向上が図られるとともに、仲間を受け入れ易い集団の形成を図ることができ、不登校傾向にある生徒の教室への復帰が促されるであろう。

III 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 「相談基地」「発信基地」としての「ほっとルーム」とは

不登校傾向にある生徒を援助していくためには、直接カウンセリングに当たる者が必要であるが、それだけでは十分とはいえない。その生徒にかかわる者が、カウンセリングマインドを持って支援していく必要がある。生徒に関わる職員がカウンセリングについての研修を深めることが大切である。また、教室復帰を促すためには、それらの生徒を迎える学級に温かな雰囲気を育てる必要がある。これらのことが、円滑に行われるように、対象生徒や、その保護者への相談のための機能と、対象生徒に関わる者への情報提供の機能を持った、「ほっとルーム」を活用する。「ほっとルーム」に対する、主な研究内容は以下の二点である。

ア 「ほっとルーム」の「相談基地」としての機能について

「ほっとルーム」本来の役割が、相談機能である。学級、学年という枠を超えてのカウンセリングを必要とする場面で、「ほっとルーム」が力を発揮すると考える。実際の来室者に対する相談は「心の教室相談員」があたるが、来室した子どもに関わる他の職員との連携を図り、援助チームの組織、援助方針や具体策の検討や、実際の援助の場としての機能を果たす。

イ 「ほっとルーム」の「発信基地」としての機能について

学級の実態に応じて必要なカウンセリングを生かした援助法の情報を提供していく。ただ、該当学級への単なる技法だけの紹介だけでなく、全職員の教育相談についての理解が深められるよう配慮し、有効な情報を発信していく。

(2) 「ほっとルーム」から発信する、カウンセリングを生かした援助法の情報について

対象となる生徒の教室復帰を果たすためには、受け入れる側の学級に、受容的態度や理解的態度を育成し、温かな雰囲気の学級とすることが重要になる。そのために、構成的グループ・エンカウンターを生かした指導を取り入れる。

〇構成的グループ・エンカウンター（以下、ＳＧＥと記す）

ＳＧＥは、集団体験学習を通して行動の変容と人間的な自己成長をねらっている。生徒は、エクササイズの中で自己開示や他者からのフィードバックを受けるため、友達との信頼感が成長し、受容的・理解的態度を育成することができる。それによって、不登校傾向にある生徒を積極的に受け入れようとする態度を育成していく。そして、シェアリングでは、エクササイズでの気づきや感情を明確化し、ねらいを定着させていく。一方では、エクササイズでの一人の生徒の気づきや感情を全員が、共有する働きもある。これらによって、学級内の他者理解を深め、信頼感を高め温かな学級の雰囲気を育んでいく。

(3) 不登校傾向にある生徒への教室復帰を促す援助とは

生徒がみせる不登校傾向の原因は様々であり、教室復帰を促すためにはその生徒が関わる学級の担任だけでは十分に対応することができない。学校全体の問題として、学校長、教頭、養護教諭、学年主任、生徒指導担当、心の教室相談員、教育相談担当者、さらに保護者も入れて援助チームを編成し、対応していく必要がある。また、これらの生徒の場合には、問題が学校

内だけでなく、家庭の問題が関わってくる場合もあるので、必要に応じて、外部の機関と連携して、チームと一体となって援助していく。

2 研究の方法

(1) 研究の実施計画

本研究の実施計画は、表１のとおりである。

表1 研究の実施計画

段階	実態把握	実践Ⅰ	実践Ⅱ	まとめ
時期	５月中旬	５月～８月	９月～１１月	１１月下旬
内容	○学校生活に関するアンケート調査 ○学級雰囲気質問紙による調査	○不登校・不適応生徒への指導の手順の作成 ○「ほっとルーム」環境整備 ○「ほっとルーム」を活用した教育相談の実施 ○「ほっとルーム通信」の発行	○ＳＧＥを生かした道徳・特別活動等の授業 ○不登校傾向生徒へのチーム援助活動 ○「ほっとルーム」を活用した教育相談の実施	○学級雰囲気質問紙による調査 ○まとめ

(2) 研究の全体計画

本研究の全体計画は、図１のとおりである。

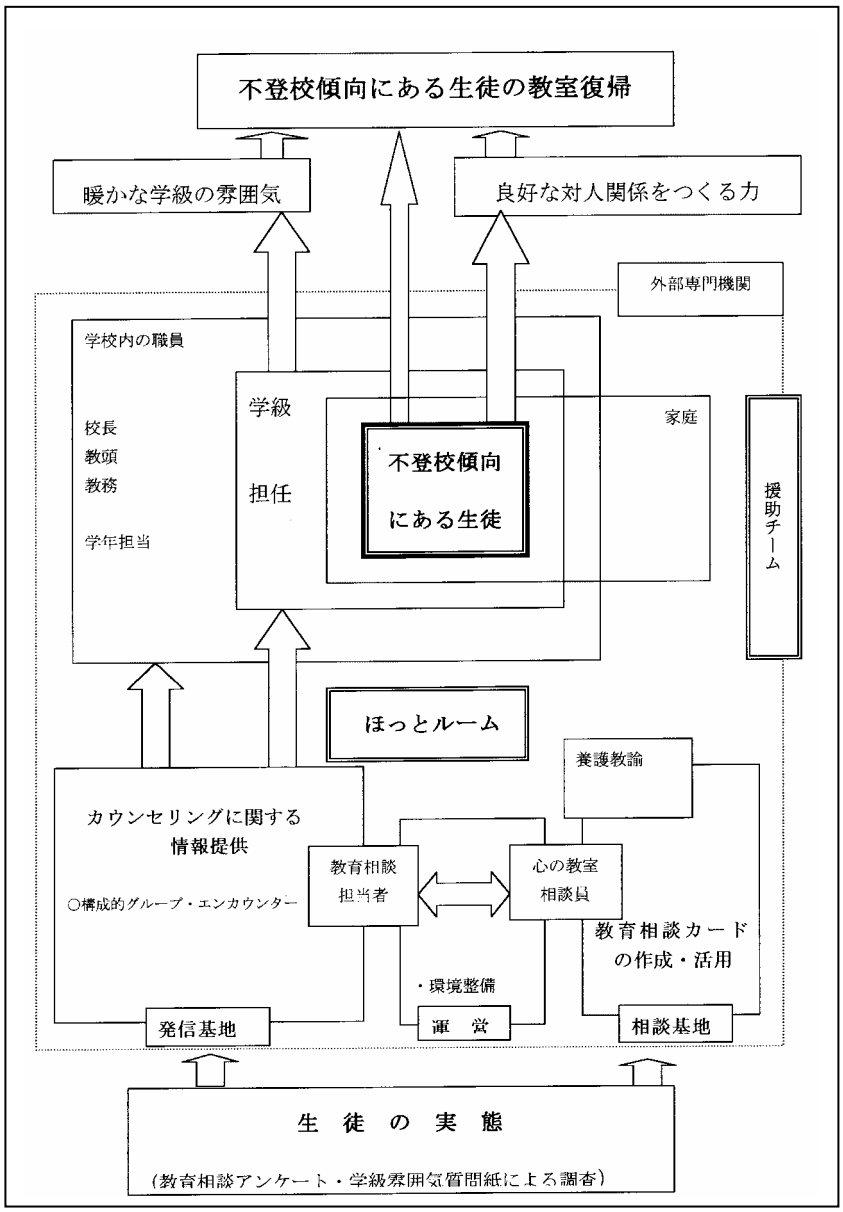


図１ 研究の全体計画

Ⅳ 実践の概要及び結果と考察

1 実践の概要

(1) 「ほっとルーム」の環境整備

今まであった教育相談室を「ほっとルーム」とした。明るく落ち着いた雰囲気になるように、机、椅子、ソファーの配置や、マスコットなどの置物、壁面の装飾品を工夫した。

また、来談者のプライバシーが守られようにすることを念頭に、窓にレースのカーテンを取り付けたり、ついたてを用意したりと、来談者が安心して相談できるよう室内の環境を整備した。

(2)　「不登校・不適応生徒への指導の手順」の作成

不登校傾向にある生徒に対して、全職員が協力して対応していけるよう、またどの学年、どの生徒に対しても同じ歩調で援助が行えるようにするために対応のマニュアルともいえる「不登校・不適応生徒への指導の手順」を作成し、全職員で共通理解を図った。

不登校傾向の見られる生徒に対して、早期から全職員で、問題に対応することができた。

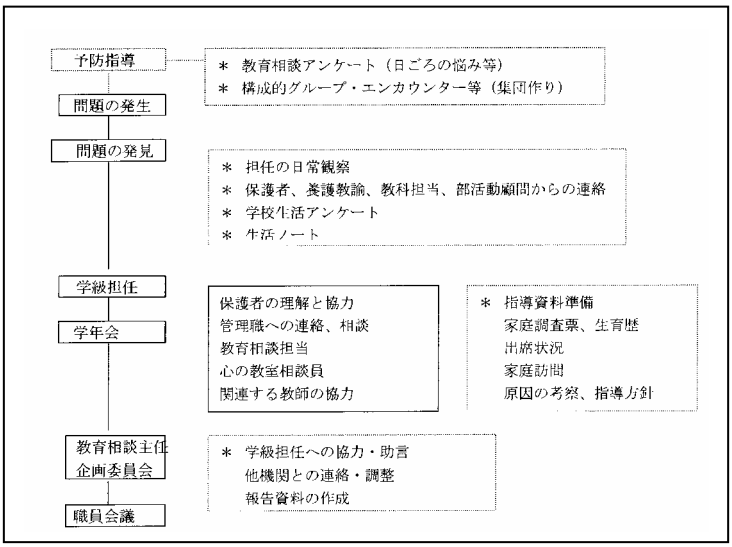


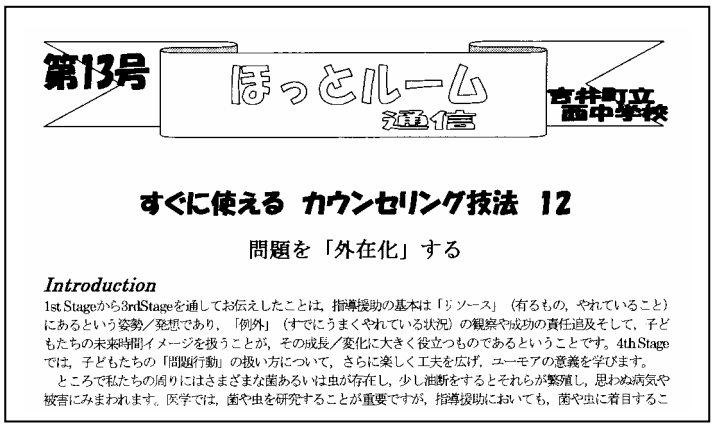
図２　指導の手順

(3)　定期的な教育相談の実施

毎週、月、火、木の午前に、心の教室相談員が在室し、来室者に対する教育相談にあたる。

(4)　「ほっとルーム通信」の発行

教育相談を進めるのに当たり、カウンセリングについて全職員の理解を深めることが大切であると考える。そこで、少しでも、カウンセリングについての理解を深めることができるよう「ほっとルーム通信」という形で情報を提供していった。


第13号
ほっとルーム
通信
吉井町立
西中学校

すぐに使える　カウンセリング技法　12

問題を「外在化」する

Introduction

1st.Stageから3rdStageを通してお伝えしたことは，指導援助の基本は「リソース」（有るもの，やれていること）にあるという姿勢／発想であり，「例外」（すでにうまくやれている状況）の観察や成功の責任追及そして，子どもたちの未来時間イメージを扱うことが，その成長／変化に大きく役立つものであるということです。4th.Stageでは，子どもたちの「問題行動」の扱い方について，さらに楽しく工夫を広げ，ユーモアの意義を学びます。

ところで私たちの周りにはさまざまな菌あるいは虫が存在し，少し油断をするとそれらが繁殖し，思わぬ病気や被害にみまわれます。医学では，菌や虫を研究することが重要ですが，指導援助においても，菌や虫に着目するこ

図3　ほっとルーム通信の例

(5)　不登校生徒へのチーム援助

ア　　対象生徒　中学校１年生　Ａ子

イ　　問題の概要

５月下旬から不登校傾向がみられる。登校しても保健室で過ごすことが多い。

（中略、詳細は群馬県総合教育センター図書室資料参照）

ウ　援助チームによる支援

Ａ子を支援するにあたり、担任、学年主任などＡ子と関わりの深い職員を中心にチームを編成した。また、Ａ子の現状を把握し、Ａ子の自助資源と多くの人から見た援助の必要なことを細かく分析し、援助の方針を立てるために、「援助チームシート」を作成していった。援助チームシートをもとにそれぞれのメンバーの、Ａ子に対する支援の内容を確認した。

実際の支援では、ほっとルームを次のように活用した。

○　教育相談の場として　　本人・保護者との面接

○　情報交換の場として　　Ａ子への支援の現状と今後の方針の検討

○　学習支援の場として　　補充学習の実施

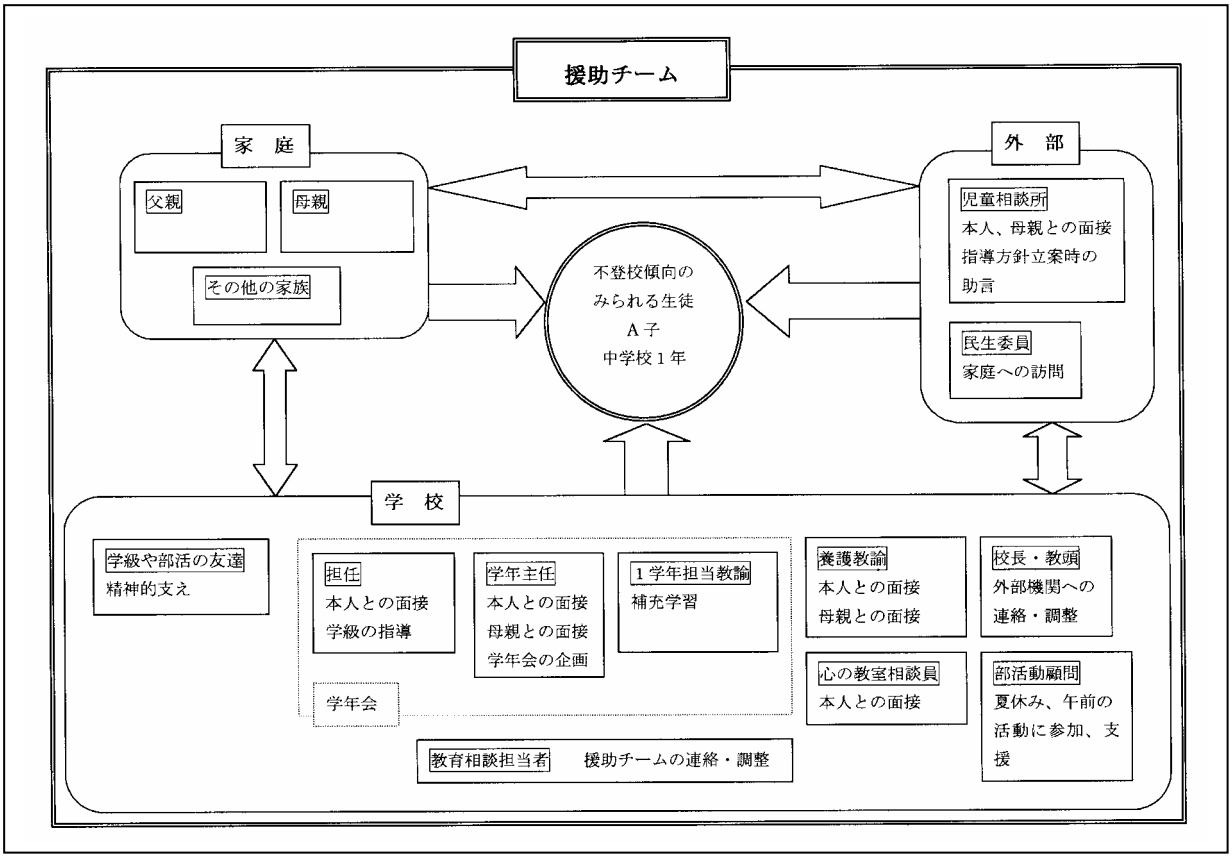


図4　援助チームのメンバーと役割

教育相談カード　援助案・記録

実 施 日:　　年　月　日(　)　時　分～　時　分　第　回
次回予定:　　年　月　日(　)　時　分～　時　分　第　回
出席者名
相談内容(　　)

生徒氏名 年　組　番 (担任氏名 (		学習面 (学習状況) (学習スタイル) (学力) など	心理・社会面 (情緒面) (ストレス対処スタイル) (人間関係) など	進路面 (得意なことや趣味) (将来の夢や計画) (進路希望) など	健康面 (健康状況) (身体面の様子) など
情報のまとめ	いいところ 子供の自助資源	得意(好き)な科目・自信があ やりやすい学習方法: 学習意欲:	性格のいいところ: 楽しめることやリラックスする 人とのつきあい方:	得意なことや趣味: 将来の夢や憧れの人: 役割・ボランティア: 進路希望:	体力や健康状況: 健康維持に役立つこと:
	気になるところ 援助が必要なところ	成績の状況や学習の様子: 苦手・遅れが目立つ科目など 学習意欲:	性格の気になるところ: 気になる行動など: 人とのつきあい方:	目標や希望の有無など: 進路情報:	心配なところ: こだわりや癖: 気になる体の症状:
	してみたこと 今まで行った援助 今行っている援助と その結果				
援助方針	この時点での 目標と援助方針	「この子どもとって必要なこと、大事にしてほしいところ、配慮してほしいこと」等			

各項目が記入された援助チームシートについては、
群馬県総合教育センター図書室資料参照

図5　作成した援助チームシート

エ　指導経過

(ｱ)　「良好な対人関係をきずく力」をつけるために

◎　Ａ子への援助

○　一対一の対人関係をつくる（面接）

<担任とＡ子、学年主任とＡ子、養護教諭とＡ子、心の教室相談員とＡ子とのリレーション>

担任は学期当初からＡ子と関わってきている。Ａ子は、教室に行けないときは、「ほっとルーム」か保健室で過ごすので、養護教諭、心の教室相談員と接する中でリレーションをつくるとともに、一対一の対人関係に慣れさせていった。

○　一対多の対人関係をつくる（補充学習、学校行事）

<学年担当職員とＡ子、学校内の職員とＡ子とのリレーション>

夏季休業中を利用して、Ａ子のための補充学習を実施した。夏休み前半は、「ほっとルーム」で１年生担当の職員が交代で指導に当たったが、後半は、他学年の教科の担当者にもＡ子に声をかけてもらったり、学習場所を３年生が自主学習に取り組んでいる図書室で行ったりして教室の雰囲気を感じさせるとともに、できるだけ多くの人と接することに慣れさせていった。

◎　母親への援助

<母親とＡ子との関係の改善>

母親とＡ子との関係について、次のような母親への援助を通して改善を図った。

Ａ子がうまく対人関係をつくれない原因のひとつとして、精神的に不安定なことがある。

（中略、詳細は群馬県総合教育センター図書室資料参照）

(ｲ)　「温かな学級の雰囲気」にするために

◎　学級の実態調査より

１学期に実施した、「学級の雰囲気質問紙」による調査の結果を見ると、女子では公平感、思いやり支持がやや低く、男子では自由がやや低く、女子よりも、男子の方が若干、クラスに不和感を持っている。

◎　ＳＧＥの実施

第１回（10 月）

○「新聞紙パズル」で班の仲間と協力し合おう

○スゴロクで自分を語ろう友を知ろう（サイコロトーク）

第２回（11 月）

○友達づきあいのワザ「アサーション」（適切な自己表現）を試そう

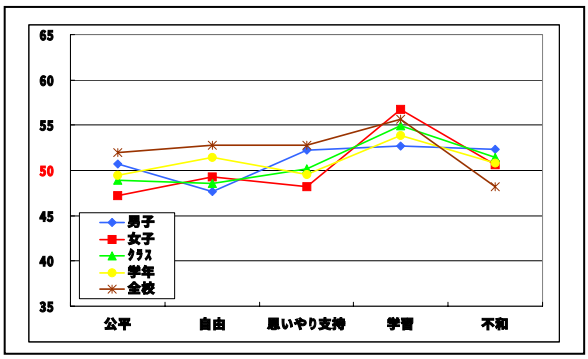


図６　学級の雰囲気質問紙の結果

２　結果と考察

ア　良好な対人関係をきずく力がついたか

(ｱ)　精神面の安定について

２学期になって、欠席日数が１学期よりも減ってきている。精神面でも、１学期は不安定な様子がよく見られたが、２学期になってからはだいぶ安定してきている。これは、

（中略、詳細は群馬県教育センター図書室参照）

などが理由として挙げられる。面接を通しての、チームでの母親への援助が有効であったと考えられる。

(ｲ)　コミュニケーション能力の育成について

コミュニケーション能力の育成については、夏休みの補充学習の時や、授業日に教室に行けず、保健室や「ほっとルーム」で過ごす時に、さまざまな人と接する機会を設け、人とのコミュニケーションについて抵抗を少なくし、慣れるようにしてきた。徐々にではあるが、コミュニケーションのとれる者が増えてきている。しかし、まだ自分から進んで話しかけることは、あまりないので、今後も継続的に指導を続けていく必要がある。

学校行事では、11 月に行われた文化祭に、合唱コンクールにクラスの一員として参加することができた。また、調べ学習の発表では、クラスの代表の班の一員として、体育館のステージで調べたことを発表することができた。やや、うつむきかげんではあったが、人前での発表を経験できたことは、Ａ子にとって大きな進歩である。このような、級友との関わりの深い学校行事を通しての自己実現の場を設定することが、対人関係をきずく力をつけさせるためには有効であったと考えられる。

イ　温かな学級の雰囲気が育ったか

全体に和やかな雰囲気で、明るく毎日の生活を送っている。ＳＧＥで他者理解が深まったことと、適切な表現方法を身に付けたことにより、授業中の班での話し合い活動がよくできている。また、クラス全体でも、上手にコミュニケーションがとれ、人間関係の大きなトラブルもない。クラスのリーダーとなる子が育っており、まとまりが、よくなってきている。

ウ　チームでの援助は有効であったか

Ａ子の自立と級友との円滑な人間関係を結べるようにするために、担任、学年担当、養護教諭、教育相談担当、外部諸機関との協力と連携を図って指導援助にあたってきた。それぞれの特性を生かした援助を進めていく上で、援助チームシートが役に立った。援助チームシート利用の成果としては、次の３点が挙げられる。

〇子どもについての情報をまとめる際、①学習面、②心理・社会面、③進路面、④健康面の４つの援助領域に分けて考えることができるので、情報を整理したり、援助の焦点を考えるのに有効であった。

〇情報のまとめで、今まで行ってきた援助について整理していく中で、チームのメンバーがそれぞれ何をやっているかが分かり、お互いの活動の意味を理解することができた。

〇援助案の作成では、それぞれの領域ごとに援助者の個性を生かした具体的な援助について整理することができた。

エ　「ほっとルーム」は十分に活用されたか

(ｱ)　相談基地として

Ａ子と母親、父親との面談の場として担任、学年主任、養護教諭、心の教室相談員など多くの者が活用することができた。また、援助チームのＡ子への支援について、それぞれの者がつかんだ情報を交換したり、今後の具体的な援助策を検討したりして対応していった。その結果、Ａ子の不登校傾向を解消することができた。「ほっとルーム」が、チーム援助の基地としての役割を十分果たしたと考えられる。

(ｲ)　発信基地として

不登校傾向の生徒が所属する学級については、対象生徒を積極的に受け入れることができるような、温かい学級の雰囲気づくりのためのＳＧＥについての情報を発信し、教室復帰を促す

援助ができた。それ以外の学級でも、ＳＧＥを道徳等の授業に取り入れ、実践する職員が増えている。また、全職員の教育相談についての理解が深められるよう、「ほっとルーム通信」という形で、カウンセリングについての様々な情報を提供していった。職員の間からは、「教育相談について初めて知ることが多く勉強になる。」「自分の子どもに接する場面で、役に立った。」などの反響が聞かれた。このように、職員の教育相談に対しての意識を高めたのは、「ほっとルーム」の発信基地としての機能を果たした結果であると考えられる。

Ⅴ　まとめと今後の課題

本研究では、不登校傾向のある生徒に対して、援助チームシートを活用してチームで援助し、良好な対人関係をきずく力をつけさせてきた。また、所属する学級には、温かな雰囲気を育て、人を受け入れやすい集団とするために、ＳＧＥを取り入れ、指導を行ってきた。その結果、Ａ子が教室で過ごせる時間が、確実に増えてきている。

また、今回の実践を通して、不登校傾向にある生徒の教室復帰を促すためには次の点が重要であると考える。

○　不登校・不適応生徒への対応について対応の手順を明確にし、職員の共通理解を図ること。
○　援助の対象となる生徒に関わることができる者でチームを編成し、それぞれの特性を生かして援助にあたる。
○　実際のチーム援助の方針決定、具体策の検討では、学習面、心理面、健康面などいくつかの観点に沿って考えていく。援助シートの活用が有効である。

今後の課題として、以下のことが挙げられる。

○　不登校を予防するために、各学級か温かな雰囲気になるよう、ＳＧＥを年間指導計画の中に位置付けて実践していく。
○　チーム援助を効果的に行うために、援助シートの内容を改善するとともに使い方を工夫していく。

<主な参考文献>
・黒沢　幸子　著　『スクールカウンセリング・ワークブック』　　金子書房(2002)
・石隈　利紀・田村　節子　著　『チーム援助入門　実践編』　　図書文化(2002)
・河村　茂雄　編　『グループ体験によるタイプ別学級育成プログラム』　　図書文化(2001)